

嵐牛 友の会便り

第十号

2017.8.2発行
〒436-0004
掛川市八坂434-1
嵐牛蔵美術館
伊藤鋼一郎
携帯番号
090-1472-2972
Eメールアドレス
takumise@
titan.ocn.ne.jp

目次

- [1]嵐牛俳諧資料館と
名称変更
伊藤鋼一郎
- [2]柿園友垣抄(十)
加藤定彦
- [3]嵐牛俳諧資料館との
ご縁
岡本 尚
- [4]大竹晴笠家の
嵐牛資料(1)
倉島利仁
- [5]講読・鑑賞の会
今後の予定
- [6]嵐牛俳諧資料館近影

嵐牛俳諧資料館と名称変更

伊藤鋼一郎

柿園友垣抄(十)——建碑以前の加藤鳳嶺——

加藤定彦

名称を考えたほぼ二十年前、無謀にも嵐牛蔵美術館とし今に至っています。長年今の名称に違和感を覚えており、今回変更することになりました。自分自身も最近まで俳句と俳諧の違いも意識していなかったのですが、嵐牛時代の俳諧は現代の俳句と違っており、この名称としました。人によっては「アラシウシゾウビジュツカン」と読み、「嵐勘十郎は知っているが嵐牛蔵ってどう言う人ですか」と質問され、びっくりしたこともありましたが、嵐牛、洋々が遺した物の収納を目的に蔵を改修し、俳諧以外にも所謂骨董の類もあるのが美術館としましたが、「どんなお宝があるんですか」と言う人もいて、迂闊であったと反省しております。蔵にあるのは昔の生活雑器であり、骨董品ではないと答えていました。(笑)

加藤先生が現在出版を目的にまとめてくださっている資料集も最終段階を迎えていると、先生から報告がありました。最近、略年表の原稿ができたことと努力し、後半は東遠州地方の宗匠として活躍していたようです。教えを乞う人も多く、連句だけでなく発句の指導も多くしていたようです。自らも発句を作り、その結果は『嵐牛発句集』にまとめられたのだと思われまます。この年表は先生が資料集をまとめている結果でできたもので、非常に的を射ており、素晴らしい出来だと思えます。

三子三筆詩箋譲渡について、須賀川市の担当者の来訪があり、来年度には譲渡を実行したいという話が市役所内部で決定されたとの報告でした。役所の行うことなので、いろんな段階を経る必要があります。現在は資料収集選定委員会の準備中とのことでした。来年三月、市長の所信表明の記者会見で発表され、新年度早々実行の予定だそうです。いずれにせよ、これからも紆余曲折がありそうです。

(「嵐牛・友の会」会長)

伊藤鎌次郎翁の『柿園嵐牛翁』(昭和六十年あとがき)のなかで鳳嶺は「嵐牛門人」の最初に挙げられ、「磐田郡豊浜(現、磐田市豊浜中野)の人である。天保・弘化の頃、浅羽地方には嵐牛を宗匠と仰ぎ、鳳嶺を中心とする俳句の仲間があり、遠州地方における卓池門二十三名中、筆頭の位置にある。天保十五年(一八四四)、磐田郡鎌田の医王寺境内に二十六名の門人達と芭蕉の句碑を建てた。嵐牛書である。

(表) いなづまや間のかたゆく五位の声 はせを

(裏) 天保十五年甲辰十月 嵐牛書

二十六名の号があるが、よく読みとれぬ。最後に、催主 鳳嶺、とある。翁は生年順の「門人一覧」にも五番目に鳳嶺を挙げ、別号芙蓉園、俗名加藤直吉、生年文化五年(一八〇〇)頃、没享年文久二年(一八六三)、五十五と記し、「知碩の先輩」とコメントを付して居られる。

嵐牛の調査を始めて以来、遠隔の地で、小グループのリーダーだった鳳嶺が入門手続きもしていない嵐牛になぜ揮毫を依頼したのか、腑に落ちなかった。

嵐牛旧蔵の連句書留『俳諧どめ』(弘化二年^{五八}奥)の巻首に、その時の連句と想われる、

初時雨猿も小蓑をほしげなり 芭蕉翁

以下、嵐牛・鳳嶺ら十三名による脇起こし連句が収録されるけれども、顔ぶれに地域や流派の片よりは少ない。貫一(八歳上)の書留『俳弟名前寛』に鳳嶺の名はなく、門人でもなかったようだ。しかし、影響は甚大で、以下、貫一旧蔵の俳書(鈴木健治氏蔵、倉島利仁君撮影)により調査した青年期鳳嶺

の俳諧活動と作品の大略を記す。

* 遠横スカ 鳳嶺

駿河国田中藩士で雪門の有力メンバー、燈雪齋こと西郷完梁は、文政五年（二二三）、入湯保養を兼ねて『葛の葉』の遠州遊歴をなし、多くの作者を「燈雪齋評月並」に参加させることに成功した。管見では、鳳嶺の初出は二十歳頃の文政十一年（二二八）で、九月分の「燈雪齋評連月三題句合」後半「八月分遅来」のところに、

鹿鳴や焚火に遠きよるの山、（エンヨコスカ）鳳嶺

の句が載る。臘月（師走）分には横須賀連の一員として「横須賀十王堂奉額／燈雪齋評四季混題五句合」を投轄・竹弦・可仲とともに願主となつて催している。月並への参加はさらに二、三年遡るかもしれない。

翌文政十二年（二二九）八月、「皆至亭（松賀）評月次」に、

しか鳴や風にちらる、手燭の灯 鳳嶺

が見え、附録の金松亭丹井の判で勝者となり、「天^{セニ}点^ニヲカサキ鳳嶺」と記されている。「ちらる、」は「ちらつく」と同意か。判者の松賀は未詳だが、磐田市福田の「中島（稻荷）社奉額」句合（催主 和日齋素楽、今日庵（素柳）宗匠ら撰、嘉永七年^{五八}刊）の開巻摺物の「大補集」に「ホン丁松賀」が見え、副の判者の成績も載せる方式が共通するので、葛飾派（今日庵）の流れを汲む江戸判者で、横須賀藩の飛脚便を利用しての評点依頼か。鳳嶺は肩書によれば、岡崎連の一員としての参加だったようである。

なお、「中島（稻荷）社奉額」は四半世紀後の催しで、鳳嶺は知石ら三人で遠州を代表して副判者を勤めている。

* 遠横スカ 鳳嶺

文政五年（二二三）、五世雪中庵対山が来遠、その成果は対山の歳旦帖や月並句合だけでなく、同派重鎮、木谷庵橘童評の月並句合にも反映した。鳳嶺は岡崎の貫一らとともに参加、文政十三年（二二〇）の「五句合」三月分に、

○行水に心のうつる弥生かな 全（エンヨコスカ） 鳳嶺

の句が初出、翌閏三月分ではなんと七組も応募する熱の入れようで、

○苔の花鳥の足跡残しけり 全（エンヨコスカ） 鳳嶺

ほか五句と「六印之部」に一句が載り、「人」の好成績を得ている。同年の

五月分にも七組応募、農家らしい

麦の秋鏡の見やうわすれけり 全（遠横スカ） 鳳嶺

内に居よと母の頼や雲のみね 全

卷中秀逸カケイ（何項）之部
麦の秋^{かみど}踵^なを石に成にけり 遠横スカ 鳳嶺

と繊細で情感豊かな人事句が高い評価を得ている。肩書からやはり横須賀連としての参加と判断される。

塚本五郎著『上野遠江の調査研究』（昭和二十四）に横須賀から西一キロほどの笠原石津、泰岩寺入口に建つ句碑が模写、紹介され、

（表）似た事の旅にはなくて夜長哉 氷花庵一牛居士

まぼろしの生を縮る夜永哉 見 風（？）

淡水人外

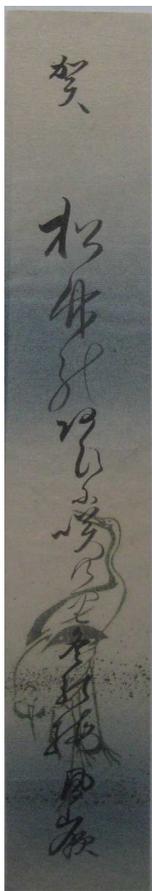
（裏）天保二年卯四月造立 筆者蘭英 補助可仲・鳳嶺

と読める。淡水人は泰岩寺住職一氷で、雪門横須賀（横砂）連のリーダー的な存在。碑面の筆者、長野蘭英（のち少風）は相良の住。嵐牛より二十歳ほど年上で、文政期から雪門の地方宗匠格として重きをなした。五十歳余の天保二年（二二三）から月並句合の評を手掛け、やや遅れて歳旦帖も編纂、鳳嶺は一氷・貫一・知石らとともにその有力なメンバーとなり、嵐牛もまた客分として句を寄せている。

「追記」その後、卓池の書留『諸国人名録』の遠江の部に、「松賀 掛ツカ 吉田屋孟蔵」「丹井 同所（掛塚） 岩間半兵衛」とあることに気づいた。天保十年九月、卓池は門人らと鳳来寺・秋葉山から天龍川を下り、掛塚に寄って掛塚本宿の丹井らと会合、連句も巻いているが、松賀の名は登場しない（鈴木勝忠翻刻『蓬宇日々記』。「ホン丁松賀」「皆至亭松賀」との関係はやはり判らない。

（嵐牛・友の会 顧問）

※嵐牛俳諧資料館蔵 鳳嶺短冊



「賀 松竹のあひに咲けり冬の梅 鳳嶺」

先日初めて嵐牛友の会の講読鑑賞の会に参加させて頂きました。小生は理系の人間で、俳諧についても古美術についても何の経験も知識もありませんが、ふとしたご縁で伊藤館長様のお世話になり、以後毎回の会便りをお送り頂くようになって恐縮しております。末尾に何時も、何かあったら投稿をとのお誘いがありますので、御礼の意をこめて美術館とご縁がいただきたいききつを記させていただきます。

横浜で定年になり、老後は大学では出来なかった樹木の生理学の研究をやりたいと思いい、それまで何の縁もなかった遠州森町に移住して二十一年になります。この地が東海地震の想定震源域になっているのと、友人に地球科学の研究者が何人かいましたので地震という現象にも関心をもっておりました。はからずも二〇〇七年の十一月から森町の奥、掛川境い(太田川ダムの直下十六km)の「活断層はない」とされていた狭い地域(二km×一km)で群発地震が起き始め、最大がM四・二に達し、M一以上だけで四百四十三回の小地震が二〇〇九年初頭までに発生しました。その後は落ち着いていたのですが、二〇一五年の夏の終わりに今度は御前崎で良く似た規模の地震クラスターが発生し、四日間でM一以上が五〇回に達しました。この二つの地震の震源断層の走行方向は同じで、延長すると一本につながります。それ以来小生は二つの地震の関連について強い関心を持つ事になりましたが、如何せん素人であり巨費のかかる実測機器も有りませんので、この線上にあって地震断層と関わりのある天然硫黄泉、塩井戸などを脚で歩いて調査をはじめました。(塩井戸は森町を走る光明伏間断層上にも有り、その塩成分は油田地帯の古海水のそれと同じである事が知られています)。掛川市八坂に「塩井が原」という地名が有る事を知り、一六年の初冬塩井戸が有るかを確認に出掛けましたが塩井神社の境内では発見できず、たまたま通りかかった嵐牛俳諧資料館にお話をうかがいに立ち寄った次第です。その後館長さんの懇切なご案内のおかげで昔あった塩井戸の位置が確認できただけでなく、さらにそのすぐ裏山に天然ガス井戸が現存することがわかり、詳細な写真迄お送りいただきました。紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。

さて、俳句とのご縁をひとつだけ。名古屋にいたころ研究室の遠足で院生たちと桑名から出て員弁(いなべ)の谷をさかのぼる狭軌鉄道の北勢線で終

点阿下喜(あげき)に達し、後は徒歩で美濃街道を関ヶ原に向かいました。秋晴れの日、左手には鈴鹿山系、右手には養老山系の山々がつらなり、先頃亡くなられた杉本苑子さんの『孤愁の岸』にも出て来る水行奉行高木家前を通って草深い山道にさしかかったところで、『山路来て 何やらゆかし すみれ草』と彫られた句碑に出会いました。「こんなところに」といささか驚いて良く見ると、この山里をたずねた蕉翁を囲んだ一夜の弟子達の名前が庄屋を始めとして連ねられて居り、強い感慨を覚えました。

最近になってインターネットで調べた所、同様の句碑が全国五十数カ所に有る事を知り、二度驚いた次第です。(「嵐牛友の会」講読鑑賞の会参加者)

大竹晴笠家の嵐牛資料(1)

倉島 利仁

嵐牛四天王の一人である大竹晴笠のご子孫宅では、昨年八月に見学会を催し、貴重な資料をたくさん見せていただきました。大竹家ではその後も資料整理を継続し、その中で発見された嵐牛の newly 資料を拝見する機会をいただきました。今回は、今回は、聯という細長い二枚の板に墨書された嵐牛発句を紹介いたします。この二点の聯は昨年八月に拝見したものと異なり、和紙に包まれたままお蔵の中に保存されていたため、日に焼けることもなく、まるでつい最近揮毫されたように見えます。表裏に一句ずつ、次の句が記されています。

おさがりやほしとおもふた田にあまる 嵐牛

よき水のつかいたき日や更衣 嵐牛

八月やみねは夜明の吹おろし 白童子

はつ雪や今朝の雀のひたつき 嵐牛

発句は春(正月)・夏・秋・冬の各一句で、「八月や」の句だけ白童子の署名。「おさがり(御降り)」は正月三が日に降る雨、『そのまま三編』所収で、句意は明確。「よき水の」は『嵐牛発句集』夏の部にあり、四月一日の更衣を迎え日差しも強くなり、冷たく清らかな水を欲する季節の到来をよく表しています。秋・冬の句は他に見られませんが、「八月や」の句の後半「夜明けの吹おろし」は、季節は異なるものの、「賤機山にて/花ちらちら飛ばし夜明の吹おろし」「花ひらひら寒し夜明の吹おろし」(明治三年俳諧とめ)の類想句があります。(「嵐牛・友の会」幹事補佐)

講読・鑑賞の会 今後の予定

第十三回 八月二十日(日)

集合 嵐牛蔵美術館 乃至掛川駅
時間 午前九時ころ～四時三十分ころ
内容 磐田・浜松・二俣方面にて
嵐牛・芭蕉・十湖らの句碑と資料の見学
(詳細は別紙プリントをご覧ください)

第十四回 十一月十九日(日)

会場 嵐牛蔵美術館和室 八畳十六畳
時間 午後一時三十分～四時三十分
内容 石川依平「宇津の山越」講読
「嵐牛発句集」講読 ほか

※ 友の会に対するご要望などをお聞かせください
また、友の会会員の方、その他嵐牛繋がりで面白いこと
がありましたらご投稿ください。



嵐牛俳諧資料館 新しい堀と共に再スタート

見事な連携 そして職人技は 館長人脈により

平成二十九年七月二十九日 撮影 事務局 伊藤英子